國文學 4

日本語・日本文学・日本文化

二〇〇八年　第五三巻五号

解釈と教材の研究

特集 ケータイ世界

❖ 中西新太郎「読者を後押しする〈誰でもない誰か〉の物語」

❖ 三宅和子「ケータイ方言――ハイブリッドな対人関係調整装置」

❖ 七沢潔、田中久美子、金ヨ二、天野慶、佐藤紀之 ほか

學燈社

國文學　解釈と教材の研究

平成二十年四月十日発行（毎月一回十日発行）第五十三巻第五号四月号
昭和三十一年九月二十五日　第三種郵便物認可（通巻七六五号）

定価一六〇〇円　本体一五二四円

第五三巻五号　二〇〇八年四月号

辞典七〇〇点突破！定評のある東京堂の辞典

江戸狂歌本選集　全十五巻完結

選集刊行会編　明和～安政期の江戸の代表的な狂歌集七十四種を原本に忠実に初めて翻刻した。江戸文芸の研究には必須の資料。第十五巻発売中定価各一五七五〇円

古句新響　―俳句で味わう江戸のこころ―

山下一海著　江戸期に発表された秀句を主題ごとにとりあげ句意を正確に読み、情感豊かな解釈と鑑賞を施す。また比較鑑賞や時代背景も読む。定価二四一五円

懐かしい日本語辞典

佐藤・小杉編著　鷗外・漱石の時代の小説から奥床しく、現代でも新しい息吹を与える語句約八五〇語を厳選し、意味・用法を詳しく解説した。定価二七三〇円

日本語の文体・レトリック辞典

中村　明著　長年、日本語の文体論・表現論を研究してきた著者による本格的な日本語のレトリック・文体論辞典。約一〇五〇項目を収録し解説定価三三六〇円

CD-ROM版 **くずし字解読用例辞典**

山田奨治・柴山　守編　ロングセラーのくずし字解読辞典と用例辞典の検索方法を同時に使える画期的な辞書ソフト完成◆詳細内容見本進呈◆価格二九四〇〇円

（価格は税込）

東京堂出版　〒101-0051　東京都千代田区神田神保町1―17
電話 03-3233-3741　FAX 03-3233-3746
http://www.tokyodoshuppan.com

稲賀敬二コレクション

全6巻完結！
豊饒にして刺激に満ちた稲賀ワールド。国文学界に鮮明なインパクトを与え続けた著者の単行本未収録論考群を収める。

①物語流通機構論の構想　A5判　8400円
②前期物語の成立と変貌　A5判　6825円
③『源氏物語』とその享受資料　A5判　9450円
④後期物語への多彩な視点　A5判　8400円
⑤王朝歌人とその作品世界　A5判　9450円
⑥日記文学と『枕草子』の探究　A5判　11550円

風土記受容史研究

兼岡理恵　古代の編纂時から江戸後期まで、風土記受容の諸相を通史的に考察。A5判　10290円

萬葉集校注拾遺

工藤力男　万葉集の読み方に根源的な疑義を呈する問題の書。醍醐味溢れる新研究。A5判　3990円

古筆と和歌

久保木哲夫編　古筆資料と和歌の濃密な関係をめぐる刺激的な38本の書き下ろし論考群。A5判　18375円

仏と女の室町

物語草子論　恋田知子　室町期の物語を「女性」「宗教」を軸に様々な角度から捉えた総合研究。A5判　12600円

文机談全注釈

岩佐美代子　平安初期から鎌倉後期に至る雅楽、特に琵琶の歴史を、親しみやすい説話の形で物語った、類例のない貴重な文学作品。初の全注釈。翻刻・現代語訳対照の読みやすい二段組で、人を得てその全貌が遂に明らかに。A5判　12600円

西鶴全句集

解釈と鑑賞　吉江久彌　西鶴の俳諧的生涯に知られざるもう一人の西鶴を見出した新しい全句集。A5判　4410円

読本【よみほん】事典

江戸の伝奇小説　国文学研究資料館・八戸市立図書館編　読本の形成から展開まで、江戸後期の長編娯楽小説の全貌を紹介。B5変型判　2940円

横光利一の小説と論理

山本亮介　大正末から戦後期という困難な時代に営まれた横光の活動をトータルで照射。A5判　5775円

笠間書院　〒101-0064 東京都千代田区猿楽町2-2-3　電話03-3295-1331
http://www.kasamashoin.jp/　ファクス03-3294-0996　（価格は税込）

ISSN　0452-3016
雑誌 03787―4

4910037870483
01524

Printed in Japan

連載

心意伝承

―遊働世界に生きる―

第七回　夢の在りかを覓めて―境界認識の原像―③　「聖域」たらしむるモノたち

本荘雅一

夜は力

なぜ長谷寺のような特定の場所が、「夢の名所」として特別な信仰対象となるのであろうか。そのための特殊な条件とは何であろうか。今回はそのことを中心に考えてみたい。

長谷寺のような、聖所に「籠もる」ということは、ただ外出しなくなることではなく、「夜という時間のなかに入ること」だと、西郷信綱はいう（『古代人と夢』平凡社　一〇七頁）。実際は日の出ている昼間の時間帯であっても、「籠もる」行為によって、身体と魂の関係を「夜寝たときの状態におきかえることによって魂の働きを活気づけ、みずからを夢見がちにする」（同一〇六頁）というのである。少なくとも「籠もる」場所に風通しのよさや、陽だまりのような明るさをイメージする人はいまい。日常的な昼間の時間空間からかけ離れた時空を演出するところにはちがいないだろう。意図的に、夜のような世界に転換する行為とは言える。

では私たちにとって本来、〝夜〟とはどういうものなのだろうか。

天の岩屋戸に天照大神が引きこもると、この世が常世闇になったという神話はさまざまに解釈されるが、『記紀』で語られる最初の祭祀であるという事実は見逃せない。今でも伝統的な祭りの多くが夜を徹して行われるのは、暗くなるのを待って秘密の儀式を行う、ということではなかろう。聖なる時間空間を求めて到達したところが、闇夜だったのである。なぜなら、私たちは暗闇においてこそ、自分の慄える心根を、自分でないものの意思や命令のように感じ取れるからだ。恋する男女が秘めた想いをささやきあうには「ムード」が必要である。

ムードという、いわば聖なる空気をかもすのは闇であって、淡い明かりはその闇を引き立てるものでしかない。

またたとえば、全国のお寺には「胎内くぐり」と称する地下道や洞窟のある所が多い。そこに入れば明かりをもたずに手探りで漆黒の闇の中をさまよう体験ができる。私たちにとって、その恐怖は下手なお化け屋敷の比ではない。純粋に、自分の内側から出てくるもののけと正対するのだから。子供たちなどは大喜びだ。聖なるものとは、こうした闇の中で慄く心、異様に活性化する全身の細胞、そうした心身の作用が与える理不尽な興奮と生理現象（失禁するとか奇声を上げるとか）そのものである。沖縄の斎場御嶽は、森であるが洞窟のように閉ざされた神域で、あるかなきかの陽光が頭上はるか上から漏れてくる。抱えていた一才の息子が天を仰いで狂ったように笑っていた。神の気に触れて過剰な感興を催し、身体も自律性を失ったような反応を素直に示す、それが闇であり、〝夜〟なのである。

叙事詩人ヘシオドス（前七五〇―六八〇頃）の『神統記』（岩波文庫）によると、〈混沌〉の娘〈夜〉が生んだのは、〈忌まわしい定業〉、〈死の命運〉、〈死〉、〈眠り〉、そして〈夢の族〉とある。ついで〈非難〉、〈痛ましい苦悩〉を生んだとも加える（三二頁）。〈夢〉がこのように、恐るべき存在の眷属として語られているのが興味深い。こうした記述を、イタリアの宗教学者アンジェロ・ブレリッヒは「《ニュクス》〔夜の意〕は、われわれの日常的な休息の夜ではない。《ニュクス・オロエ》〔破滅をもたらす夜の意〕は、ギリシャ的想像力が創出しえたもっとも暗く恐ろしい力の一つである」（『ギリシャの宗教的世界観における夢の役割』ロジェ・カイヨワ編『夢と人間社会（下）』一〇頁　一九七八年　法政大出版局）と解釈している。つまり、夜とは〝力〟であるというわけだ。『神統記』での「夜」は、夢をはじめさまざまな負の神々を生み出す〝力〟であるが、結局のところギリシャ神話的世界観を共有する人々は、夜が人間の生命にとって最も深刻な影響力を持つと感じ取っている。近代ヨーロッパがそうした闇を排除もしくはコントロールしようとし、夢を精神分析の対象として、理知の明るみに引き出そうとするのも、そうした闇の力への恐怖心の後遺症を克服しようとしてのことである。闇をあくまでも負の威力と感ずる彼等の心意伝承が、生きている証と言ってよい。

日本人は、先に挙げた「胎内くぐり」のように、闇を死の世界とばかりでなく、再生の母胎と感ずる意識を持つ。その意味で、闇とは生死そのものを深め、更新する

〝力〟として、私たちは感じ取っているのである。そこで、長谷寺と夜の力ということに焦点を合わせてみたい。となると、中世期成立の『長谷寺霊験記』（続群書類従第二十七輯下）が、西郷も言うように露骨なプロパガンダであるだけに、長谷寺の何をウリにしたいのかはっきり現れていて参考になる。ほとんどの霊験が、夢との連関構図で語られるが、その中でも、〝夜〟との関係で、字数も多く、内容的にも華々しく語られているのは、なんと「長谷寺炎上」の事件なのである。

長谷寺炎上という霊験

前回、万葉集巻第三〈四二八〉「土形娘子を泊瀬山に火葬る時」の人麻呂の歌「隠國の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ」を挙げたが、その当時火葬はまだ珍しいものであった。泊瀬と火との因縁をすでに思わせるものでもあったが、『長谷寺霊験記』上第十に、五回におよぶ焼失事件が詳しく語られている。実際は六回あるらしい。①朱雀天皇天慶七（九四四）年。②一条天皇正暦二（九九一）年。③後一条天皇万寿二（一〇二五）年。④後冷泉天皇永承七（一〇五二）年。⑤堀河天皇嘉保元（一〇九四）年。そして、『霊験記』に記載のない、⑥順徳天皇建保七（一二一九）年である。炎上の度ごとに、大きな「霊瑞」があったことが述べられており、こうした事件を、必ずしも否定的にとらえてはいないのが興味深い。ことに、「夜の火事」として明記されている、①・④・⑤に関しては、霊験についての記事も詳しい。簡単に要約してみよう。

①山城国広隆寺の僧十四名が同時に同じ夢を見た。「長谷の観音が広隆寺の薬師如来に後事を託して外国へ遷る」という。その他もろもろの前兆があって、ついにある夜、長谷寺に落雷、炎上。寺域ほぼ全焼した。と、燃えさかる炎のなかから、雷が発生したように光るものが飛び出し、後ろ山に飛び入って一晩中光り続けた。行ってみると、黄金に輝く石の上に、「頂上仏」の「面（頭部）」があった。火災後、長谷寺の焼け跡には日本中の烏が集まったり、山の上空には、姿形もなく、馬の足音や轡の音、車の轟き、巨大な物の飛ぶ音、などが響きわたった。ある夜、寺僧や参詣の人々が御堂の灰に向かって勤行していると、またも虚空に馬の足音やら鍋を叩く音やらして、空から会話が聞こえてきた。「八幡神の使者として、武内大臣（宿禰）がご来訪でございます。」返答は女性の声。「ただいま加茂大明神がお

いで遊ばすので、いったん立ち去ってお待ち下さいませ。」すると東の山へ向かって馬の足音が去って行った。しんと静まると、今度はにわかに御堂の灰から黒々と叢雲がわき出たかと思うと、雷鳴轟かし北へ向けて飛び去った。かたじけないことであるよ、「当寺ノ焼失ニ諸神冥道モ動キ給ヒケル事」は。

④陸奥国の、熊という下女が参籠して、夢を見た。金色の烏が火を吹きながら長谷寺に飛び込み、出火炎上。その烏は「頂上仏面」を背負って飛び出し、御堂の前の棕櫚の木にかけた、というもの。二日後の夜に本当に長谷寺炎上。「熊」の夢の通りに、「頂上仏面」は、唯一焼け残った棕櫚の木の上にあった。

⑤夜亥の刻頃に出火、全焼。人々が悲嘆にくれていると、観音堂の灰のなかが光っている。掻き出してみると、二枚の瓦に守られて、またも「頂上仏面」が無傷で出てきた。その話に感激した紀伊国の盲人玉虫が参籠し、霊夢をえて、目が見えるようになった。

火は霊であり、炎は霊の尾、といった説明はよく見るが、まさに長谷寺の炎上は神霊の一大ページェントであったのだろう。またその復興のために全国のさまざまな人々が散財したり労力を提供したり祈ったりと、広範囲な結縁が生ずるという効果をも説いている（上第十九）。つまり、信仰の拠り所とする施設の焼失も、その領域の天地人神の連関遊働として、実に建設的に解釈しているわけである。もともと建造物は仮のもの、その土地や天の気象が放つ霊威を感得し、我が身の徳として研くべしというのが仏道の本願であった。土地の霊威の象徴的なモノとして、烏や、馬の足音、磐座、樹木などが挙げられているが、そうしてみると、馬の霊性が、他の資料でも印象的に取り上げられているのに気が付く。

ぬばたまの形とはたらき

『長谷寺霊験記』上第十九に次のような話がある。宇治関白藤原頼通は長谷寺に多大な寄進をしているにもかかわらず、信心浅いために観音の利益不定の扱いであるが、寺の焼失の際にさまざまな物資を運び入れた駄馬が、死後仏果を得て天上に生ずという。同じ『霊験記』下第五。征夷大将軍坂上田村麻呂が出陣する前、長谷寺に参詣すると、寺の童子が葦毛の馬を曳いてきて、田村麻呂の乗馬にするようにと与えた。その馬は自分で状況判断の上適切な行動をとり、水面上を走り、山の峰から峰へ飛び移るという、「大聖ノ変作」というべきものだ

った。陸奥征伐後、「三ノハザマ」というところでその馬は死んだ。埋葬すると、墓から光が放たれ異香が薫った。掘り出してみると、十一面観音自在菩薩であった。それを本尊としてその場に寺を建て、新長谷寺とした。この例などは、馬＝観音菩薩という構図で語られているわけである。

元亨三（一三二三）年成立とされる『清水霊験記』（続群書類従第二十六輯下）にも馬の霊瑞が語られている。物の怪に取りつかれた女が、夢で白馬に乗った癩病の人に会い、三つの丸薬をもらった。その馬が去るときに、鐙が戸に当たる音がして目覚めた。その女を看病していた家族も、同じ音を聞いた。不思議に思ってみると、女の枕元にも、確かに馬の爪痕がはっきり残っていた。手にも丸薬三つあり、一つ服用して病は癒えた。

このように、馬や、その足音を霊験の証のように物語るのは、実は万葉時代からの心意伝承とも言える事例がある。

隠口の　泊瀬の國に　さ結婚に　わが来れば　たな曇り　雪は降り来　さ曇り　雨は降り来　野つ鳥　雉はとよみ　家つ鳥　鶏も鳴く　さ夜は明け　この夜は明けぬ　入りてかつ寝む　この戸開かせ

（巻十三、三三一〇）

反歌

隠口の泊瀬小國に妻しあれば石は履めどもなほし来にけり

（巻十三、三三一一）

隠口の　泊瀬小國に　よばひ為す　わが天皇よ　奥床に　母は寝たり　外床に　父は寝たり　起き立たば　母知りぬべし　出で行かば　父知りぬべし　ぬばたまの　夜は明け行きぬ　幾許も　思ふ如ならぬ隠妻かも

（巻十三、三三一二）

反歌

川の瀬の石ふみ渡りぬばたまの黒馬の来る夜は常にあらぬかも

（巻十三、三三一三）

なんの疑いもなく読めば、泊瀬に住む女性を恋い慕って来た男が恋人に同衾を求める歌と、それに応えて女が、父母の監視にあるので存分に思いは遂げられないと拒みつつ、いとしい人を乗せた馬が毎晩のように来ればよいなあと、男の気を留めおく駆け引きと見える。恋物語を主にして考えると、こうして夜は単なる背景に、馬は器具でしかなくなってしまうが、そもそもは、これだけのイメージが揃えられたからこそ、ここにあたかもロ

ミオとジュリエットのような恋物語が成立し得たのだと、捉えなおしてみるべきではなかろうか。シェイクスピアより八百年以上も前に。小説的な想像力をたくましくすると、泊瀬と、その他の地域にそれぞれ王家があって、敵同士の他家の〝天皇〟と、泊瀬の姫とがたまさか恋に落ちて……、といったストーリーが思い浮かんでくる。実は、そう思わせるのは万葉集編者の編集の妙なのである。この巻第十三は、民謡のような伝誦歌が多いことは先に述べた。つまり、泊瀬にちなんだ全く別々の民謡が、こう配列されただけで相聞のやりとりのごとく構成されたのかもしれないのだ。特に注目したいのは、「ぬばたまの」という枕詞を分けもつ、夜と黒馬とのイメージ連関である。

「ぬばたまの」がかかる言葉としては、黒・夜・夕・月・夢などが挙げられる。古文の授業では、ぬばたまと呼ばれるヒオウギの種子が黒いからと説明され、枕詞自体は歌の調子を整えるために出されているもので、特に意味はないと教えられた。が、釈然としなかった。確かに、伝達内容と関係する意味は持たないかもしれない。しかし、なぜだか枕詞には印象的なものが多く、そのように軽くあしらってよいものとはどうしても思えなかった。

折口信夫はこう言う。そもそも「枕」は、「我が国の信仰では、魂、殊に生魂の集中保持せらるる処」（『全集一〇』二四頁）であって、「枕詞」とは「文章の中心になって、その生命を握っている単語、あるいは句の意味である。多くの場合は、これを逆に、文章には、必ずおかなければならぬ生命のある語」（『全集一〇』二一頁）であると。つまり、枕詞とはその詩歌の生命指標である。詩歌とは音読すべきもので、殊に、伝達内容と関係するかどうか以上に、その歌の生命力を強力に発揮させる音が、枕詞なのであった。ためしに「ぬばたまの」と音読して下さい。なにやら粘着性のある気配に満ちた霊魂を、感じませんか？　その様な力そのものである夜の闇に、その闇のよどみが形をとって夢と見え、黒馬と見えなどしたのではなかろうか。むしろ夢や黒馬の出現に、霊界との交渉成立の功を、見出したというべきではないか。

馬の音ぞする

いずれにせよ馬についての日本人の意識には、人間の乗り物とみなす以前に、霊魂を運ぶものというイメージが横たわっていると見える。なぜ競馬と相撲と蹴球には天皇賞・杯があるのか。実は、どれも日本人の霊魂観を

あらわしているからである。関取のしこ名はそれぞれの出身地の山野河海にちなむ。すなわち国魂の受肉したものが関取であり、彼等は文字通り国境争い、つまり関の取り合いをしているのだ。いわば国魂と国魂とのぶつかりあいが相撲である。サッカーは蹴鞠との縁で天皇杯が設けられたのだろうが、直接的には中国唐代以降の蹴鞠の系列にある。ジャッキー・チェンの映画『ドラゴン・ロード』で、フットサル規模の競技場で、羽のついたゴルフボール大の鞠を、ジャッキーらが見事な足技でパスし、奪い合い、敵の鞠域へシュートするシーンが思い出される。日本の蹴鞠はむしろ「八人場」の競技法を導入しつつ、独特の文化にしたものだ。四方に配した桜、柳、楓、松の木の下に二人ずついる鞠足（競技者）が、鞠を地面に落とすことなく蹴り続けるという、回数を競うものである。鞠は鹿皮製の白鞠で、松または柳の枝に紙捻の緒で結びつけて持ち運ぶ。ふだんは祭壇を設けて安置したらしい。つまり鞠は神の精であった。そうした精神文化を、現代のサッカーに結び付けているのである。馬では京都上賀茂神社の競馬や、福島県の相馬野馬追い、三重県多度大社馬上げ神事など、馬の走りを見る祭祀が全国におびただしい。これらの競技が本来は、霊魂の趨勢を見るという心意伝承があるからであろう。

そのように考えてみると、男女が契りを結ぶという営み、即ち結婚に、馬が介在することの意味も解けてくる。実はイメージ世界に魂が運ばれ、そこにおいて風景を一つに共有しなければならなかったということなのだ。現実生活を謳歌するか、心中情死するかは、同じ事の側面同士でしかなかったと言える。逆に言えば、霊界的風景を、馬がもたらすということ。そこにいたる男女の掛け合いの歌もある。

赤駒の足掻速けば雲居にも隠り往かむぞ袖枕け吾妹
（万葉集巻十一、二五一〇）

隠口の豊泊瀬道は常滑の恐き道そ恋ふらくはゆめ
（万葉集巻十一、二五一一）

味酒の三諸の山に立つ月の見が欲し君の馬の音ぞ為る
（万葉集巻十一、二五一二）

「問答」に分類されているが、三首で一組という珍しい形式である。男→女→女の順になる。歌の意味内容を解釈するなら、「馬に乗って去らねばならないのだから、今のうちに私の袖を枕としなさい、いとしい人よ」→「泊瀬の道はすべりやすいから気を付けて」→「三輪山から立ちのぼる月のように、みたい（逢いたい）あなた

を乗せた馬の足音が聞こえる」ということになる。だが現代人の感覚で考えるなら、この三つは「問答」と言えるようなかみ合い方をしているとは、とうてい思えない。岩波古典文学大系の解説によると、巻第十一も伝誦歌謡が多いとのことで、土屋文明は『万葉集私注』（一九四九年　筑摩書房）で、〈二五一〇〉の「袖枕け吾妹」の語句が露骨で低俗であるのを、民謡であることの根拠としている。ということは、この三首もやはりもとは無関係な民謡を編集して、古代人の感覚での「問答」に仕立て上げていることになる。合理解釈を削って、連関構図の観点でこれらのイメージを考えてみる。

〈二五一〇〉「赤駒の足掻速けば雲居にも隠り往かむぞ袖枕け吾妹」は、天空をかける赤駒の燃えさかるような肉体、からみつく袖、女、という構成図。力強さと優美な色情感を催す。〈二五一一〉「隠口の豊泊瀬道は常滑の恐き道そ恋ふらくはゆめ」では、泊瀬の道、尋常ではないような疾走のイメージ、恋、おののき。派手な色彩や肉感は落ちて、胸騒ぎしている。〈二五一二〉「味酒の三諸の山に立つ月の見が欲し君の馬の音ぞ為る」で行き着くところは、三輪山に立つ月、姿なく闇に響く馬の足音。すなわち神秘神聖な風景の観想である。

こうした図柄の一つ一つに、何か象徴的な意味が隠されているといった分析的解釈は無用である。純朴に、とどのつまりとして得た宇宙図、すなわち曼陀羅なのだと実感すればよい。むしろこのこと自体をもって、目指すところへの到達が成し遂げられたことになるのではなかったか。「馬の音ぞする」は、恋人を乗せた馬の足音が近づいてくるというよりも、自分の関与している事件、たとえば恋愛が、何か神聖な風景をもたらしたときに、その証のように聞き取ってしまうものであったろう。『長谷寺霊験記』の語る長谷寺炎上事件と、虚空をかける馬の音、『清水霊験記』が示した霊夢をもたらす馬の足音、いずれもなんらかの破局と始動とが、実は一つのものであると告げる究極の風景を為している。こうした、集団的なコンステレーションが、時代や地域をつなぐようにして共有されるのも、心意伝承である。

夢と射目と馬と狩とのコンステレーション

夢を見る話と馬を見聞きする話とがなぜそんなに結びつくと私が述べるのか、まだ納得しがたい人も少なくないかもしれない。恣意的に結びつけているだけではないかと、疑問を持たれるかもしれない。しかし、かつての日本人がこれらに強い結びつきを感じていた決定的な証拠もある。

赤駒を　厩に立て　黒駒を　厩に立てて　其を飼ひ
わが行くが如　思ひ夫　心に乗りて
高山の　峯のたをりに　射目立てて　しし待つが如
床敷きて　わが待つ君を　犬な吠えそね
（巻十三、三二七八）

『万葉集私注』にも指摘されているが、これは一首のなかで男女の掛け合いになっていると言える。「思ひ夫（妻）　心に乗りて」までが男声で謡われ、「高山の」から女声で謡われる民謡であると、土屋は言う。「赤駒や黒駒を飼い育てて、それに乗って行くように、いとしい妻がわが心に乗って離れない」（男声）、「高山の峯のくぼんだ所に射目を立てて、獲物を待ち受けているように、床を敷いて私が待ちかねているあの方のことを、犬が吠え立てたりしないように」（女声）、というほどの意。

注目すべきは、射目である。射目とは、岩波大系本の頭注によると、「柴などを立てて射手が隠れて獲物を狙う設備」とあって、目は矢を放つ穴のことだと説明されている。「射目立てて　しし待つが如　床敷きて　わが待つ」とは、射目を立てることと、床を敷くこととが一つに発想されている。つまり、床を敷くというのは、単に共寝をしたいという性欲的な話ではなく、「イメ（射目＝寝目＝夢）を立てる」という、一種の呪術ではなかったか。夢の世界にて恋人を待ち受ける。夢路を迷わず行くことができるのは馬であった、と、こういうことにならないだろうか。この〈三二七八〉の反歌（三二七九）の直後にある歌が、それを証明している。

わが背子は　待てど来まさず　天の原　ふりさけ見
ればぬばたまの　夜も更けにけり　さ夜更けて
嵐の吹けば　立ち待てる　わが衣手に　降る雪は
凍り渡りぬ　今さらに　君来まさめや　さな葛　後
も逢はむと　慰むる　心を持ちて　ま袖持ち　床う
ち払へ　現には　君には逢はず　夢にだに　逢ふと
見えこそ　天の足夜を
（巻一三、三二八〇）

この後「ある本の歌に曰く」として、類歌を載せている（三二八一）。比べてみると、以下の部分が全く同じである。「わが背子は　待てど来まさず」「ぬばたまの夜も更けにけり　さ夜更けて」「現には　君には逢はず夢にだに　逢ふと見えこそ　天の足夜を」。つまり、この部分が、変更を許さない生命指標であろう。「いとしい方が来ないまま、ぬばたまの夜はふけ、現実にはあえないけれど、夢の世界で逢うことこそが、天界の満ち足

りた境地であることよ」。この訳し方が適切かどうかは措いても、射目と夢とが連関遊働を起こすものであるのは間違いなかろう。これらの歌を、あたかも一連のものとして編集することで、古代人達は日常のなかに、一つの儀礼すなわち祈りの形を見つけた。狩猟と恋愛と馬とのかかわりの根底に脈動する〝祈り〟が、同じ動機に発するものであったのを示したのである。

『万葉集私注』は、巻六〈九二六〉の、吉野の秋津の小野の山に「射目立て渡し」馬を並べて狩を立てさせる、という歌に関して、「イメを立てるには地の利を得た一定の場所があったものと見える。吉野の夢の和太の如きも、このイメを立てた場所から起こった地名であろう」と言う。射目と夢との音通を根拠にしているのだが、呪術的な期待感を催す点でこそ共通していたのではなかったか。摂津国風土記逸文「夢野」条と、仁徳紀三八年条に、夢相のとおりに海を渡る鹿が射殺されてしまうという説話がある。この夢野は、もとはトガノという地名である。神功皇后摂政元年二月条には、新羅征伐から凱旋する神功皇后に対し、夫の故仲哀天皇第一夫人の皇子、廂坂王・忍熊王が明石から淡路にかけての海峡を封鎖し、皇后を迎え撃とうとした。その際戦勝を祈願して、トガノで祈狩をしたとある。つまりトガノがのちに「夢野」とも呼ばれるようになったのは、「射目野」としての性格をともなっていたからである。また播磨国風土記飾磨郡条には、品太天皇が夢前丘から国見をする話と、狩をしたところを射目前と名づけた話とが並列されている。ついでながら馬の走るシーンを載せて、「英馬野」地名起源としたり、牝鹿が海を渡ってたどり着いた島を伊刀島と名づけた等、古代人は夢と射目と馬と狩猟とを、これでもかというほどにコンステレートさせているのである。

冥界に籍を置く

まとめると、長谷寺のような夢の名所とされる聖地には、他の居住空間の延長上にあってなおかつ特別な信仰対象となるような、何か特別なイメージ世界を人々に認められる性格があった。隠口という枕詞が象徴的だが、籠もる、すなわち「夜の力」が発動する代表的な空間であった。ぬばたまの夜が生み出すモノは、獰猛な火であり、馬であり、その疾駆する馬蹄の響きであった。火事と喧嘩は江戸の華というが、獰猛ないのちの輝きとしての炎を、ひとはハナと呼ぶのかもしれない。現在の長谷寺に火事はないが、牡丹をはじめさまざまな花が咲き乱れる「花の寺」としての名所となっているのも、そうし

た後遺症・心意伝承かと言えば、考えすぎであろうか。

泊瀬は雄略紀にあったように、狩り場でもあった。ことさら祈狩（ウケヒガリ）と言わなくても、狩にはウケヒの性格が濃厚である。射目からのぞくのも、あえてこの世を垣間見（かいまみ）して、なんらかの兆候を感じ取ろうとする呪術であろうし、獲物が現れ、仕留めるのが霊験を得た証である。まさか天皇が、今日の糧食を得るために狩猟をするわけではあるまい。

床を敷いて夢を授かろうとすることと、射目立てて狩をするということは、霊界との交渉成就を祈念する行為であった。この世の現実だけでは、かえって安心できない。この世ならぬ世界に籍を置くことの方が、よほど安心して私達は生活できる。盆や彼岸に先祖供養をするのも、旅先という異界の記念品や写真を所有するのも、そうした心意伝承である。今は競馬ファンでなければ実感できないが、この世の時空を穿（うが）って冥界との交通が開かれたときに、「馬の音ぞする」のである。

大好評　學燈社の現代語訳シリーズ

美しい調べそのままに、
古典の魅力的な世界が、
いま現代文で甦る。

各巻　四六判　並製本
定価　1,680円(税込)

源氏物語　訳―秋山　虔
竹取物語・伊勢物語　訳―吉岡　曠
方丈記・発心集・歎異抄　訳―三木紀人
蜻蛉日記・更級日記　訳―犬養　廉
大鏡　訳―保坂弘司
枕草子　訳―稲賀敬二
平家物語　訳―山口明穂
今昔物語集・宇治拾遺物語　訳―小林保治

全8巻

東京都新宿区西早稲田3-5-10
〒169-8608　03(5228)7154
學燈社

由水常雄著『正倉院の謎』

美術品の見方が変わる
歴史観が変わる

歴史の闇に隠された正倉院の宝物たちの
数奇な運命。「正倉院の真実」を解きあかす。

カラー図版50点

A5判　定価3600円(税別)
発行 魁星出版　発売 學燈社

お問合せは
〒169-8608　東京都新宿区西早稲田3-5-10
03(5228)7154　http://www.gakutousya.co.jp/